

第四百話

碓井貞光事

『前太平記』上 卷第十六 三二一頁から三二四頁より

[碓井貞道]

さて、信濃国の碓氷峠^(巻)に父子がいる。父は年を取り、それでいて重病で臥せていた。子はまだ幼い。ある時、その幼い者を枕元に呼び寄せ、申し上げたことは、「お前のまなざしは、普通の者ではなく思っているの、幼いが、今から父の言い残すことを忘れるなよ。私の先祖は橘のなんとかという者で武術の達人であったが、とある事件で咎められ、この国に配流されて、もう三代もの時がたった。お前

事に坐れて

当国に配せられて、

の母は子のないことを嘆いて、この国の諏訪明神^(武)に願立てして、お前を授かりすぐ母は三日もたたないうちに死んでしまった。私の父の祖先は天皇に咎められた

勅勘の身なれば、

身であるため、世に出て人と交流することはない。そうであったとしても、お前で四代目となるので、それほどまでに天皇の咎めがあることはないだろうから、成長

さのみ天の咎めも有るまじければ、

後はどのような方にも仕えて、武勇の名声を示し家も再興させるのだ。これこそお前の先祖に対しての大孝行になるであろう」と、丁寧に息子に申し含めて、まもな

く亡くなった。その子供はその時はまだ七歳であったのであるが、父の遺言をよく聞いて心にとめて忘れることもなく、成長するにしたがってよくよく心の中に思う

長に従つて

熟意に思ふ様、

ことは、「弓や馬、刀、薙刀、強い力や素早い武芸に通じていなくては、遺言のよ

「弓馬打ち物、力量早業に精しからずしては、

うに家を再興し、名声を示すこともできない」と思ったので、十歳くらいから、山野に出て、鹿や猿を追いかけて、様々な鳥を射落として、手に余る大きな石を転が

手にも及ばぬ大石を転ばし、

して、ある時は牧場の馬に縄の手綱をかけて、高い山、広い野を走り回り、自らを切磋琢磨して、その身を鍛え、昼も夜も武芸に励んだ。そうすると、心も強く、力も人に勝るようになったので、ある人が荒童子という異名で呼んだところ、自らそれを通称とした。十四歳の時に、自分から元服して、名前は何と名乗ろうとあれこれ考えたが、「いやいや、関係のない姓を探すのも無駄である。祖父の代からこの

「いやいや知らぬ氏尋ねんも無益なり。

地に住み親しんだのだから」と思って、すなわち碓井荒太郎貞道と名乗るのだった。もともと家は貧しかったので、小さいころから遊びでやっていた殺生（狩猟）

少き時より翫びし殺生を業として、

を生業として、日がな一日を過ごすのだった。どうにかして、立派な人に仕えたい

旦暮の命を送りけり。

ものだと思うが、このような奥深い谷に隠れるように住んでいては、そんな望みが
かなうはずもない。そう思っても、どこにも縁もなく、どこを目指そうと思っ
ても、行くべき土地もわからない。どうしようかと思ひ悩んでいたのだが、急に思い
出して、「私は諏訪明神の申し子とかいって聞くものなので、よもや神の加護のな

「我は諏訪明神の申し子とかや聞くなれば、

よも加護の力の

いこともないだろう」と、上下二つの社に百回参詣し、大きな祈願をはじめ、運ぶ

無からん事も有るまじ」

歩みのたびたびに、風や雨、霜、雪などの苦痛に耐え、十七歳の秋から十八歳の冬
までに、彼は大願（→百箇度参り）を終えたのだった。今度は、百箇度参りが達成

今度は

満参なればとて、

されたのであるからと、宝殿に十七日昼夜こもって（祈願して）、真心を尽くし

宝殿に十七日参籠して

丹心をぞ尽くしける。

た。それゆえ、その彼の誠意がとても深くて丁寧であることを、神の御心も愛しく

されば

其志の深切なる事、

神慮も哀れにや

お思いになったのだろうか、夢で霊験あらたかなお示しをいただいたところ、貞道

思し食しけん、

はとてもありがたく思い、心ばかりの経を唱え捧げ、自分の住まいにも帰らない

心計りの法施を捧げ、

己が栖にも帰らず、

で、まっすぐ甲州路に差し掛かり、相模国を通り、渡海の船に乗って、上総国につき、太守のご邸宅に推参して、取次を求める。

【貞道、頼光への推挙を願う】

当番の若侍が外に出て、これを見ると、全体的に汚れている男が、腰に刀を差し

一荒れ荒れたる男の、

腰刀横たへて

て挨拶することもなく、中門のところにじっと立っていた。若侍は近づいて、「誰

会釈もなく

中門に徘徊たり。

だ」と問う。「私は信濃国の者であるが、貴人にとって一番目か二番目の（家臣

御内に取つて一二の人に、

の) 人にちょっとお目にかかりたい事情がある。取り次いでください」と、お頼み

そと見参に入りたき旨あり。

手引きして給はれ」

申し上げるのだった。若侍がそれを聞いて、「一番か二番の人と伺うのは、渡部殿

でございますか、卜部殿でございますか。どちらに会いたいのだろうか」。「い

や、どちら様ともその名を知らないので誰とは申し上げず、ともかくどちら様にし

ろ一番か二番の人に取り合って申し上げられてください」と頼むのだった。若侍は

計らい兼ねると思ったが、立派な男がそっけなく申し上げることに、流石に駄目だ

意得ず思へども、

冷眼しき男の人望もなく申すにぞ、

流石否とも

とも言いかねて、「少しお待ちください」と言って、中に入り、渡部にこのことを

云ひ兼ねて、

話す。綱はこのことを聞いて六郎（卜部）を呼び、「このようなことがあった。何か思い当たることはないか」。卜部は眉を顰め、「いや、私の身において信州に縁ある者は知らない」。綱は頷き、「なるほど、私たちの知っている者であるならば、名を名乗って誰に会おうかと言うはずである。ともかく、貴人（頼光）にとって、一番か二番の人会おうと言うのはきっと互いに知っている者ではない。誰にし

一定相知りたる者には非じ。

ても、面会しないという理由もない。さあ、会って、どんな用事かを聞くべきである」と、二人は共に立ち上がって出ていき、その男を招き入れて、話を聞くことになった。その男が申し上げたことは、「私は信州の碓氷峠で、年月を過ごしておりますが、貴人にお仕えしたいという望みがあり、長年願望を抱くといっても、私は取るに足らない身の上であるため、知り合いもなく、どこにも頼りとする人もない

其身人数ならねば

相知りたる者も無く、

何処を憑むべき方も無ければ、

ため、無駄に年月を送っていたところに、諏訪の両社に百箇度参りを行い、このこと（→奉公）を祈願する。そして、満参も夜、不思議なお示しをお受けいたしたので、まっすぐにこのご邸宅に昼夜休まず走って参上しております。どうかお二人の推薦を、貴人に乞い申し上げます」と、余念なく申し上げるのだった。二人とも目を見合わせて手のひらを叩いて、「貴方の体格といい、また今朝の主の不思議な夢

「其人の骨柄と云ひ、 又今暁君の御霊夢と云ひ、

のお告げといい、いずれにしても、その箱と蓋がぴったり合うようなことは、疑う

旁 其函蓋の符合せる事

べきとところはない。早く、この事の次第を（主に）申し上げよう」と言って、ト

疑ふべき処なし。

部がすぐに席を立て、太守（頼光）にこのことを申し上げる。

ト部先づ座を起つて、 太守に右と申し上ぐる。

【貞道、頼光の家臣となる】

総州太守（頼光）は、不思議にお思いになり、急いでお連れせよという命をお出しになったので、渡部とト部が揃って、あの男を連れてきて、御前に参る。頼光はよくよくその男をご覧になるが、その精悍な面構えは普通の者ではない。綱・季

其頼魂尋常の者に非ず。

武、二人と並んでも、劣るような勇士とも見えなかったので、頼光はほくそえみなさって、「お前の先祖はどのような者だ」とお聞きになったところ、その男はかしこまり、「そのことでございます（→お話いたしましょう）。私は幼くして両親に先立たれ、そのうえ親族はおりませんので先祖の姓名をも知り申し上げません。

然も一類とても無く候へば、先祖の姓名をも存知仕らず候。

もつとも曾祖父であります者は、橘のなんとかと申した者だが、天皇にお咎めをお

勅勘を蒙り

受けして、信州の碓井に流され、私までの四代の間、その場所に居座り申し上げて

信州碓井に貶謫せられ、

おります。もともと取るに足らない田舎であるため、その地に住む者も、私の先祖

素より卑陋の僻地なれば、

所の者も

其事跡

を知っている者もおりません。それゆえ、知らない姓名を名乗っても、何になろう

存じたる者も無く候。

かと思い、拠点にしている土地に従い碓井荒太郎貞道と名乗っております」と申し上げる。太守はこれをお聞きになり、「なるほど、当然のことであるな。昔、虞舜は土着の民、瞽瞍の子であったが、以前と変わって堯帝に登用され、仁徳を施して中国四百余りの州を見事におさめる。伊尹は有辛（地名？）の陰士であったが、殷の湯王に招かれ政治を手助けし、殷の世は六百年余りを保ち、その聖人の名を後世

に残したのだ。お前も武勇を後世に残すのならば、そこでやっとな碓井の家を再興し子孫が永遠に繁栄すること、差支えないだろう。どうして知らない姓名を名乗るこ

子孫の無窮繁栄を致さん事、

とがあるだろうか」と、すぐにお盃をお与えになった。貞道は席を立ち拝謝して、(盃を) 三度傾けた時、雲雀毛の馬に切金の鞍を置いて、白檀絨の鎧に、小具足を

雲雀毛の馬に金具の鞍置きて、 白檀威の鎧に 小具足付け、

つけ、同じ材質の毛の燕尾の兜に、黄金作りの太刀を一振り、弓ややなぐいに至る

同じ毛の燕尾の甲、 金作りの太刀一振、

まで、一式すべてそろえて、引見の始めであるからと言ってこれをいただき、その

見参の始めなればとて之を賜り、 剩へ

上、(頼光ご自身の) お名前の一字を取って、「貞光」という名をお授けになった

御名の字を分けて 貞光とぞ召されける。

のだった。ここから始まって、綱・季武と名声に肩を並べ、頼光朝臣のお側を離れず、両手足や耳目と同じように、忠勤に打ち込み、何度も手柄をあげ、名高い勇士

股肱耳目の如くにて

となったのであった。

注釈

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

※壺・信濃国の碓氷峠……現在の群馬県碓氷郡と長野県北佐久郡との境にある峠。

※貳・諏訪明神……長野県諏訪にある元官幣大社。祭神は建御名方富命と八刀売命。信濃国一の宮。

頼光四天王三人目の勇士碓井貞光の登場です。前の季武の時と比べて貞光は心のしっかりした度胸のある人物のように受け取れます。今後も貞光はその度胸で物語中で大きな働きをします。

今回も頼光はカッコイイですね。これを初めて読んだとき、頼光の貞光に施した処置が素敵すぎて興奮しました。やはり『前太平記』での頼光は「主人公」らしく描かれているのが面白いです。感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子